へ 5
5685

京都帝國大學圖書

門へ
號5685
卷

序

夫月色千海角天涯古
今之異也然而波上楊柳之
月鄉樹之色之象之於二而我
邦於月芽生之色古今之
異之二而無變自非思
地術豈以異之於我乎

[illegible]自以為神仙家之子毛[illegible]
[illegible]宮十月[illegible]於一云故
[illegible]山[illegible]中復做[illegible]自天[illegible]
[illegible]之[illegible]平[illegible]扶[illegible]月[illegible]
[illegible]詩[illegible]松[illegible]月
[illegible]國歌[illegible]
[illegible]生[illegible]
[illegible]

[illegible]以[illegible]為[illegible]
天[illegible]平[illegible]
[illegible]國歌[illegible]
[illegible]
[illegible]月[illegible]
[illegible]超[illegible]
[illegible]言[illegible]
[illegible]子[illegible]歌[illegible]
[illegible]月[illegible]

素之筆以出奇説似并芝房
并叢萩氏又稱竹良云
己巳三重陽前三日

東京處士枕山老人厚撰

靈巖樵唱 処士源寛書

今自然如見之者の梅　竹良
未地を經たるなるこの留釜　為山
吾之後裔の細小ゆるもらん　良
如なるをつくしかれの色　山
松色の間を　良
無之深之之
石鑿ハ何之之之侍之者　良

[illegible]

[illegible]

乘かゝる船うゝも空　山

宰外ゝ小茶ゝのうへゝ徳ゝ[illegible]　良

矢立の中へたゝき書ゝし　山

自代ゝ水田にあゝむ山のかゝ[illegible]　良

門の掛りおゝり火ゝ付あと　山

約束替ゝれゝ帰義の制　良

居ゝうゝ用の品ゝる前町　山

[illegible]　良

[illegible]　山

[illegible]　、

かせゝ井ゝたゝゝ志ゝり石　良

きゝ[illegible]の品ゝ[illegible]ゝ紀俄面　山

又人ゝゝゝ苦労ゝある　良

宿の札罪ゝゝゝ迄か年守　山

[illegible] 良

造作は大工[illegible]　山

建仁寺[illegible]　良

[illegible]　山

[illegible]　良

写幅は自見[illegible]　山

手[illegible]　良

一羽来て賜る　山

夕看経の末[illegible]　良

[illegible]漁の[illegible]　山

[illegible]　良

[illegible]　山

破[illegible]　良

[illegible]　山

[illegible]良　吾十八

梅咲て鶯の巣造りけり　良

眺ゆるかふしるる如月の空　西章

羽蹴墓と人の達て立夷哉　雄

見そめしよりそ伺の寄る歳　良

きさらぎと自代うつる春石の門　素

野こうる時ハ萩も野ゆく　雄

降しつる素こ八位さる秋の雪　良

雉の供答の雪庭をしき　素

活まるる毎の破色活結ひうち　雄

咲しそ見そ惰うなる姫　良

化粧しく路もきるとうの蔵　素

吐ときしそ雲の絹出し　雄

自のさ又沿ふ出てこうる宜　良

ふ咲ふ立ふ八色きうる暗　素

歳毎の印橋里結やく寄て　雄

蘭藻は廉 水のうつくし 良
見えわたる果なき海の広さ 素
春の海の多い大和路 雄
等餅も石橋の苔の花 良
しら波の人も繰せらるる 雄
繰の機数へ木服持て来 素
帯結び虞美人草の乱れ 良
玉掛首飾掛よこうる夫婦連 雄

殊数 蔵しくるる変わりなし 素
ちぢの部の温泉書 ひらひら見出でて 良
末の夏の鈴なる 良の 雄
水引の笑うるおよ 行のめ 素
蕎麦の彩色 変せるなる 良
鍬の夏の服 暗 夏の 雄
家 よ 悔 きこ 素
変のまま 丸 墨 良

[illegible] 雄
[illegible] 蓁
[illegible] 良
[illegible] 雄
[illegible] 蓁

仲良
西章　第十二
三雄

[illegible] 芳舎
[illegible] 宵芳
[illegible] 秦重
[illegible] 後芳
[illegible] 文海
[illegible] 海雄
[illegible] 鉄池
[illegible] 九郎

門松のゆゑよる兄まつの松このめ　素盞
元日や心新らしく成る年　徐水
小松雪よ数そとにたのもしうぶ　松陰
寄ぬこのうち安しこの宮ゆ来る蛍　暮左
千葉ゆ葉ゆ咲くる者もるふ春このみ　菊池
陸奥うる白よりの細き柳しのみ　禾田
葉ゆ陸この徳利ゆ蔦ゆ舟　半夕
葉ゆ陸ゆ陸ゆ陸ゆ陸ゆ陸ゆ　蛙村

松菊ゆ　番の行梅や春の梅　左一
春ゆ陸ゆ陸ゆ陸ゆ陸ゆ陸ゆ　春雪
捨ゆ生ぬ雪や春ゆ梅ゆ　トサ　陸夕
十月や雪ゆ陸ゆ陸ゆ陸ゆ　雪水
十月の日新ゆ春ゆ生ぬ　元史
ゆゆ陸ゆ春ゆ百合の花　春雪
山ゆ陸ゆ百ゆ　ハリマ　古芝
足蕨や一つの春ゆ老ゆ　北梅

白雨[illegible]唐[illegible]樹に鳴る　松考

[illegible]ハ文字[illegible]萬[illegible]　アキ　四瑞

二葉三葉や[illegible]袴の菜　完然

つまつく雪[illegible]　一蝶

蕎の羽の末[illegible]蟲の聲　フレコ　豊山

居並ぶ[illegible]下地[illegible]の宿　ヒゼン　麦紫

湧口の[illegible]見え[illegible]春の水　ヒコ　甚年

一樹こそ実[illegible]華[illegible]梓　サツマ　桃蔵

野ハ枯て[illegible]山影に　ワシマ　琴古

咲[illegible]ハ一香よし　アフミ　乙也

貝焼や[illegible]白帆　イカ　逸史

手をかさし[illegible]遠やしの宿　イセ　蕉白

[illegible]舟　ミノ　山士

[illegible]出る雨に[illegible]　清涼

[illegible]流[illegible]一木　ヲハリ　梅裡

一日よりはるかにつきやま水根引　静愛
うるはしやかに小枯を寄る芝の上　山郷
我うちよりはるかものの多しこやら　素性
舟心皆岸よりかくもてる秋の雪　芝橋
雪のふる枝毎にうるおふ　士前
雪かすみの浮海うるをる水　蓮宇（ミカハ）
懸の好きうめ寄の松梅ば　喜芙
うるはしの押しらせ性このる　遠江（トウ）　杜水

第四　中秋　柳　ちり　古年（スルカ）
旅寝　月　秋　夏　文衣　尊雪
嘉　月　所　見元　の寄ば　五杜
愛深　かと深　と寄　ちり　紫系
八橋　中　ちり　懸　る上　素教
夏　の　ば　一　ちり　つ　育　ちり　素陵
や　毎　と　寄　かき　ば　寄　牡丹（イウ）　士敬
佛　と　の　ば　ち　と解　一　寄ば　雅吟

弟子ものて葉もいきそうに水仙花　遠水

そうに葉を伸ばし真の葉ゆく　一孫（サカエ）

葉はそこらの石ふまれそうにむの花　宇井

葉桜や梅をかくして咲く梅実　学巴

水仙や梅の実の葉の色　卓雅

春陸の葉先の葉に牡丹の芽　寿之（ムサシ）

鶯の立ちはなれうつむかるる　立波

林檎の花やはらかに蕾丹　聖丹

春風の吹くこの頃や秋の空　春成

人参の陰ゆるるこの頃　知春

雪新の初出づるこの頃　青市

寒さのよいこの人を寒さ白重麦　丹之

寒月青々や豊園ちらのよう変　義村

梅側の梅の梅花を給ふ　萬山

人の人ものの人ものの葉この頃　等哉

咲ぬ月ものものの人　春陽

是袋よりつく蕨ふるさとや初給　甘海
弱ぬるさやうふ雪袋の小さうさう　氷壺
人ゝ見ぬ夕ゝ城松蕨ハ花ゝ　芳叶
蕨蕨よ出りのつゝや蕨の色　東和
川辺うハ覚のもやゝうの花　青象
野あき新よ強ゝ梅ゝの面　弘美
寝ふ人の驚るき点や初ゝの世　きゝ雄
反ゝる新悟ゝうゝ百合の花　雪雄

春新や屠蘇ゝ花鎌ゝつゝきゝ　象得
わの新つもくゝるのゝ下や風倒る　五雀
かゝ春えゝくゝゝゝゝゝゝゝゝ　東究
新ゝ云ゝうゝゝハ強ふ傳水ゝの　泰民
中恒の新ゝの日ゝゝや角ゝう　蕉女
梅ゝくゝやゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　悟然
飛ゝよ水田ゝゝ　蕉法叔
回ゝ世ゝゝ出ゝのゝる安ゝる　半醒

紅集め尽されし数なり蕗の薹　かつ女

木の底も匂ひあるらし春の雪　糸柳女

筆ゆるしの紙を起すや啼雲雀　月染

幟は小舎人の兜小松かな　移霞女

新簾や宵志ちらえの草いきれ　稚年

秋近き枕に紀なり板の風　二水

水瓶の中まで入る藻の花　蕗平

葉櫻や流れ日の色も川出る　思樂

よるほどの重きぞなりぬ梅の月　氏城

古郷では折ても取れり梅の花　林甫

夕暮き扇に鳴くして東風なり　こてふ

葉いろ〳〵雲の立なり五月雨　成朴

数ちりて尽て陰も牡丹哉　志柔女

落ちりしも文捨ての文衣　太露

檀林の松桜やの声　文路

菊の葉の来て揃ひたり子供達　山稼

蓼くう沖や何をまちて一文字　夢丸
初恋や見しらぬ枕ものいふる　きよの
寒月や山の石ずゑたかきべ　梅崖
嘆ずる見る尼寺に菊の香　完路
白の蛟も来てやうもし池の鴨　小の好
ちらし時や赤ちよう遠る夕蒲団　林丈
短夜や惜しまれ咲くの井の桂　春元
白く蛟の南に行ぬ恵の秋　序路

春よりうる人のたうもの　素水
蓮初や年を果敢のうるる精　智海
侍茅や侍茅よりかうる老い　村雅
尼寺の侍花まちやう寺柳　楷面
雪よ却春てう影の温やう夕べ　学雄
新くしの庭見合せ多やう一清　美壽
一寸ちうう四方陣や五月雨　汀水
茅ち尼や春ちこの中の青蘆　芳泉

東西菩の和さたるハきる水鶏ぞ　乙彦
杜宮の初ちて序よりうれ事の　大森
世界よりたの葉りぬる末の雫　一庭
行先ちりる侍よ春ふるぶ　成伍
散ちるもしの見よ集つる紅葉ぶ　春長
乃雲の数つ〻き清水ぞ　有唯
命先結人を除り　雲の無　宇山
深きる中清水流る岩の雫　酒雄

和の生中雲ハ西行の通り筋　見外
石和川ちる
古るの八月ちる八重の数　三重雄
出家ぬる家の棟ちの雄子の琴　峯山
口あるの一形他の子ちや雀の子　半牛
梅ちの春よ咲ぶ帆立貝　江山
夏明ち宗　重ぶ牡丹ちの　不國

[illegible]

千鳥や海松[illegible]　　晴江

[illegible]　　[illegible]中　重吏

[illegible]　　サト　西鳩

[illegible]　　有葉

[illegible]　　エチコ　市精

年[illegible]　　越古

人[illegible]門[illegible]　　蓬宝

[illegible]　　[illegible]

[illegible]　　[illegible]

[illegible]　　[illegible]

[illegible]　　[illegible]

[illegible]　　羽安　陵山

[illegible]　　雪山

[illegible]　　金英

[illegible]　　西陽

[illegible]　　羽氏　素山

[illegible]　　江春

月深し　八重の山吹　峰雲
菊の花　顔も如月　菊の花　雲貫
思ふ人　伝へもしたく　花の夜　一止
山さくら　人の心　思ひ出　松甫
秋の月　清秋の光　光　松央
夕暮れ　雲の色　白し　雲の夢　十徐
五月雨　夜の夢　思ひ出　雲悟　左林
藤の花　やまとの国　ふる　秋の月　芳鳥

遠き　春の　秋の月　物寂　黄雲
雲の　思ひ　秋の　五月雨　秀二
秋の　五月雨　四月雨　桂蕃
秋の　花　夢　人　行　雲　雲志
物　春　思ひ　月　月　一
年　秋　夢　三　和　紀代　琴峰
氏神　の　鶯　八　梅　の　壮山
雲　遠　春　五　春　帰　下毛　嘉仙

[illegible]ものなり松の間　巣硯
小原の方を表や蘇の[illegible]　下サ　泉家
[illegible]　巻の四　巻象
[illegible]の人[illegible]　この庭
[illegible]の[illegible]　無雑
[illegible]の[illegible]　角杵
[illegible]　上サ　羽人
[illegible]　女別

松の[illegible]の[illegible]の時分　松古
[illegible]の[illegible]や物語　画村
[illegible]の[illegible]　他山
[illegible]　アハ　樓山
[illegible]　上モ　一弘
[illegible]の[illegible]　孤雲
[illegible]　船云
[illegible]　宗俊

[illegible] 孫登
[illegible] 舊古
十分[illegible]一[illegible] 梅柳 [illegible]
[illegible]蓬蒿の蔭 [illegible] 藤尾
[illegible]水四の[illegible] 梅休
[illegible]の[illegible] 交[illegible]菓盒子 [illegible]心
[illegible]面[illegible] 如画 黒斎

仕付[illegible]子葉や初浴 大芽
[illegible]の影の光[illegible] 麻志
[illegible]の[illegible]水[illegible] 松齋
[illegible] 蓮[illegible] 羅雄
[illegible]の[illegible]岸の起[illegible] 麻良
[illegible]家[illegible] 芽
[illegible]熟柿[illegible] 志

二ふたつてつの傳清る蓮丈　病
吟ぎんよりよりて吟ぎんハ信しんを来る　良
雲くもふそのそくよりめてやる　雄
菓をくを人蕣者ハ聖さるの集りて　芽
帆ほをうう移の伐色ハ半てある　志
部をうう廣うを夫姻さ白ハ　病
よりの留をを花をを花のを　良
弾を居る地系の味り奉よりて　雄

まを素酢よ粥をるをり　芽
吸出り使らをきを年を月　志
りの出んこのうを白ふ芝焼　病
部無よ奉よ変り煤挿を　良
横奉の来ふを嶽の立うを　雄
を出利を八兎角悟このう毬　芽
弦童よりよ手多数働光　志
吟ぎんる千数をり年一年よ　病

[illegible] 良
[illegible] 雄
[illegible] 芽
[illegible] 志
[illegible] 腐
[illegible] 良
[illegible] 雄
[illegible] 芽

[illegible] 志
[illegible] 腐
[illegible] 良
[illegible] 雄
[illegible] 芽

大芽　八　雄　七
林志　七　林良　七
松腐　七

[illegible]　　仲良

[illegible]　　悪敷

[illegible]　　良

[illegible]　　敷

[illegible]　　良

[illegible]　　敷

[illegible]　　良

[illegible]　　敷

[illegible]　　良

[illegible]　　良

[illegible]　　良

[illegible]　　敷

[illegible]　　良

[illegible]　　良

[illegible]　　敷

[illegible]　　良

[illegible] 術
理[illegible]人[illegible] 良
今法[illegible] 飯[illegible] 術
[illegible]中[illegible] 〃
[illegible] 良
中[illegible] 術
[illegible] 良
[illegible]人[illegible] 術

[illegible] 良
[illegible] 術
[illegible] 良
[illegible] 術
[illegible] 良
[illegible] 術
[illegible] 良
[illegible] 術
[illegible] 術

[illegible] 良

大勢の[illegible]人[illegible] 俳

何[illegible]ふやうに[illegible] 良

[illegible]年徳のある男 俳

夢のうち先の[illegible]ある 良

東俳
林良 吾十八

物[illegible]ある[illegible]自 [illegible]雄

[illegible]の[illegible]の水 林良

[illegible]自[illegible]杖[illegible] 西山

何[illegible]ふやうに[illegible]光 一仍

[illegible]の涼し[illegible] 良

四[illegible]見時し 雄

小馬[illegible]の外に[illegible]世[illegible] 仍

仰山しう居合めう奉　山
共喜ぶ出る事八陳るものなし　雄
消えて八めゆる毎ゆ籌火　夷
仲夢の如ふ山の下く傘たき　山
心苦てなる文を掃出せ　仍
結ぶ夢のうち八時代新内　良
蒲萄の鏡よ赤き板の月　雄
何ゆ為ふ佛ふ山ふ出ず　仍

鏡の池ゆ山つる事
人仕ふる沈ふ新ふ出ず　雄
沈ふ人ふ出ふる笠竹　良
沖ふ月吸ふ山ふ帰来ふ　山
猫ふ水無ゆ機嫌ふ山ふ　仍
一愛ふ方ふ新子の使ふ　良
矢部ゆ橋ふ山ふ本ふし　雄
かんふふの笠ふ森見ふ露点　仍

[illegible]　山
医者の考えて又薬の[illegible]　雄
必[illegible]　良
自代より[illegible]水を[illegible]　山
小[illegible]中より[illegible]種芝　阿
里人も[illegible]のある社の[illegible]　良
[illegible]伝来[illegible]　雄
後より[illegible]神社　阿

[illegible]　山
真[illegible]後引[illegible]　雄
大工の[illegible]人[illegible]　良
[illegible]毎[illegible]中の[illegible]　山
[illegible]　阿

[illegible]雄九　向山九
[illegible]良九　一阿九

情於万羽蒔きの方法を覚へ　吾世
之芽を摘取り根蒔き出　丹良
自兄妻自兄しに伝ハ蒔蒔を　世
蒔きこつをくを人々者伝て　良
掛く形り茎雑法きるハ作り　世
仕舞仕ると山田植きる　良
あ結琴この琴を有り月水竹　世

常きる間より陳て来る白　良
耳の垢をうらうて深きて　世
折々きるきよ間こうの毎　良
信つをハ根岸ハ赤ふ委　世
遠とをる都新宋を　良
西四方きあるあて自社先生　世
時刻よりと踊をめる　良
きこつ方ハ絵を西の立伝て　世

わかなつむ　春日野の雪を分て　若菜摘　良

ふる雨に　ぬれぬ物とは　あやまちて　世

紫つゝ　香の樒　ぬれぬ　良

夢遠く　背ける　春の　眼の　光　丶

待てみる　男よ　あの　ある　紙　世

春雨に　ぬれて　ぬれて　やう　良

霧の　おりて　ぬれて　山　世

遠ちらて　野　ある　草の　色　良

花は　雨　ぬれて　世

思ひて　毛　ぬれて　ぬれて　ぬ　良

ぬれぬ　茶を　飲　飲　る　川　世

眼　ぬ　ぬ　る　る　時の　料理の　良

雨　取　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　世

四　何　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　良

鶏の　鶏　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　世

知　ぬ　ぬ　牛　八　鶏　鶏　ぬ　ぬ　良

先石垣をうつし市神　世
青蘿を持てやすらふ物を哭　良
袴つゝまるハ迷ふなる役　世
信ずる事なき大廣間　良
陰ふみ外よ空の青うり　世

音世
竹良　吾十八

時雨ふる岸ふるあや庵の春　自國　亀志
傷苔の付きぬ焼ト姫山川　素良
四ツ橋かゝる夢る水四ツ　梅月
紅梅や主の点ぞ尽くなる　素堂
沙先よ蓋ぬ半傳や春の水　一葉
夢ぞ折角兼ハ来るこの春　南谷
八ツ石を吟ずうぐひす出ル　李國

咲くとのみ偽をつくし仕舞ふや沙弥尼　如竹
芙蓉やあとのりかめする面の下　可持
菊ちるや守り葉ひとりかきくれ　宗之
年暮やすくなき見ぬふり乗掌　子笑女
庵主のうしろめたくぬぎや丘の松　如案
乗よかくて寒梅を見せ寒ぶり　一髯
乗賜のさるくり如や古板　如行
はるるや弟子の空の春　梨軒

酒折宮にて

行春や水うつ若の老　春邨
暮ゝの春くる面のたのもしや社上　来ゝ
自然や人ちるまで咲ぬ人の意き　松栄
面ゝぬ水八岳をまの新緑　花水

永日や旅を新しく成き　竹窓
陽炎や陽ゝ八のうぬ白ゝ弱り　文老

四海雅客の夢を呼べる

輝くやまの日は高く　　乎人交　憬徳

行春や飛燕や書きてけり　　宋堂

伊賀やとろろ汁を寒の水　　青紀

根つよき百の一日や冬の雷　　雷石

新しき八雲の掘り　　要住

夕べの春の星よりも明の夢　　要徐

ゆるる秋の蛍を寒の夢　　樵村

雲もゆふ陽の春の柳べ　　要糸

寒色の春きよ伸る紫苑べる　　一風

空新よりなつかしや鳴の時　　斗角

水と思ひ菊を雪と雑の乱　　梅芹

角の出て春の蛙の鳴くべ　　梅交

海の春の星の羽織べる　　之枝

細き杖は水の面　　乎秋

百年の春よりの義べの乱　　四角

山さくらかぞへてうゑし桜哉　我省

面白さ見る事の若くこそ雲のうゑ　田々

雲ぬいろ〳〵なる紅葉の木　文鼎

嘗こそ生きかはりぬの油鹿べし　鶴路

陽春や松元若ちる丘の松　来五

夕べの雨の江に降るや初昆　才馬

山の雑に降こそ来るうゑの秋　医仙

舟を降り舟の中ちる夕柳　桂石

行秋や明り生ちる能の月　徳山

生ちる其京のすめる花　香芸

水底の蓮つゝ白は其の葉ぐ　九江

寒ち蒲を磨蘇の多蓮の蓮の多　兎外

寒る知り舟のたりやうこの色稲　國秀

蛙ちつゝこの島帽子や鶴角光　民丸

秋の日よりもまぬ松のこゑ　芳山

菊水や行方しらぬ人の心　蓼舟

はるばるとまた四方山の和歌　ふ軍

傳授のうけ給はるまぬ雲　林外

他國より住まうしかの寄合にふるまひ

今日古人をふかんの元服かなれば

祝よりなほ傳授まをふ神なこゑ　法上

四十余年の喜秋なりけり

扇に見なれし桜の面さこゑ　西章

三笠山なる傳幾枝をかくまた　松福

帰さきしの模さる姫ぶ　壽山

新築を考へるうるこの形　かよ幸

歌なるる寿も五さきて　壽　村　その女

慶ぶ後のつまやのさうる給　池盛

かこつ事て来まる出れ村　抑志

咲も傳るれ慶ぶ牡丹　西陣

語も句も和よ志くれの長かな　一

気にさへなるも近し落葉の寺　梅月

葉に芽の二葉よ守りの時雨　丸吉

父母は居る時雪親ましの哉　嘲石

井底にてのまよひ十年五年無雑
無藝にして只まろきをおもふのミ

明けはた入用とぞ花に嵐の花盛　佛志

同門佛良大人集をつくりて国々の
法限をまねくといふ志に切なれハ

梅にのかぬの花見ん笑いの香かな　向山

葉山の時をの集を清しき法名教の国にたを乞
あんといふ佛良兄のまめやかなる心をうつしてと

よそに出て嗚呼そむく寒しき春の雪　一陽

讃州宇和

黄金は来るなる勤への人への哉　少年 太貸

先師西馬先生没後十とせあまりの
世茂の理にそむけて闇路にまよひくよ
ふかのもとさらにしての法教の巓にゐ
気をみてしつりて見事に木で書く
志くよむる心に立てゝ此あの古き
書をゆるのみ

面目も春くるかな梅見ゆる二月への香　佛良

附録

焉哉心まと壮年みして永き病ひよ去所
永きなの絶かたのすり枕元ゆふ
向き此世の名残とて文久甲子如月廿八日
英泉が筆のしるしの末ゆえ
七回忌に当れば大等併雄併志
そ[illegible]人のすめよまの世出編の末
附録して亡父七回忌の志なり

追補附録一冊

[illegible]水の底まで深き

焉哉併

かるる自然の情を学ぶ一説を学ぶ
此巻より巻一冊のうちまつり　伯父
この七回忌に当る[illegible]

[illegible]千　みちの　喜の曙　少年　大等
雄子の琴学　結んで　なる　ひりて　併良
[illegible]　[illegible]　[illegible]　一伯

仮宅後自の役者に見るまゝ　三雄
鶴の鶴の等の直なる　林志
林氏の縁を家合の刈干　白山
まゝ出てのしゝ参口も利ず　永松
清局の前さへ鮮まる人の来る　清弘
出てまゝかゝまゝの毎　林雄
又しまゝ形痛やまる　矢尤
多の接嬰の知る者なぬ　雨章

自のまゝ清まゝの場　英治
閑る酒釜一参の寸出　蕉軒
新まゝのかゝ　多芝
まゝ江戸の仮　子弟
行水新置ぬ　萬山
のゝ書のまゝ知ず　雷石
出代男かゝ　峯哉
出まゝ来る新呼ず　双鈴

造化は花間八重を結ぶ　林支
門こゝろ高き人かよふ深閑　白水
屏樓より力持ちする五六人　松羅
ちつても面の隅ゝ平帳　美寿
つる毒ふるまつて首を投出す　左林
新うめよりかゝる呂変　芳鳩
古びの世自樓の屏風や二仕書　五背
ものゝよりの思る舌　梅石

みゝけの西瓜皆まる蕾は自　平庭
秋中に開き五位鷺の夢　竹樵
落きりの子蛇を殺路の傍人　春風
きゝよ持ふて瓶を壽こうる　晃
美花の真ゝこるゝ長と上閣取　酒
五十業も越き傳屋考こる　見
きのふそるゝ向の世や受かゝる　見仙
経ゝ考は夢墨る無　蒙遊

雪峯義存禪師語句

麻環 ようる 阿字 七めうう 為山

折ゝうの学ぶ者 多 向こうめ 等栽

茶の点もうる 寒ゝう 七四り 寒仰

先亮一人 如めう 一重めう 宇山

ゝうう 陸 茶 等う ふの宝 弘眞

茶の堂つる ゝうや 仏めの イハキ 左林

臣寒う 計 ゝえう ゝるめの 芳信

過去仏の数 ゝうし 法の 乙義

ゝう梅の学 ゝ 金のう 一むの 五雄

ゝうう法 寒 ゝの ゝん ゝ 慶 寒奇

ゝの 学ゝ 多 知る 寒 ゝ 宋 ゝう 沼水

ゝ 宋 梅 ゝ 夫 ゝ ゝめう 西雄

寒 ゝ ゝ 移 ゝ 寒 人 ゝう 雄

ふの ゝう 法の 知 ゝ ゝ 法 ゝ 空 見外

雪峯義存禪師語句

名をのこすたまうて法華の
折々おこなひたまひ手向水
なる為に鉢を向まり
異儀出来るまじきの傳ひこの
傳のしるしや出る和
つくしまの体しるの霊
なるを故名をのこす董仲
為なる八仏のまうしば

仏無
天花
一瓜
誉遠
白陽
拾石
幾秋
芝國

義出やかるる事も夢のごと
亡人の物をうつのふたらば
閻仏桶の水をうつるや弟の重
なる為に洗ふ墓のこゝ
法堂や大仏原の家のもと

他行しるる其法華ふたまうたる
異事来まる軍一直を弱び
まうたるまうたる舎衛こゝ

裏像
群宿
両章
宜千
仏外
梅月
向山

おすれ出さ　去や　梅よりさそふ　一阿

[illegible]

[illegible]　老母

[illegible]　いま女

[illegible]　清祈

[illegible]

母の魚見法めて　休し　むの夢　つる女

[illegible]　永杉

山ぶき　古ほそ　ものさ　むさそう　杉病

角ぜよ　先ろ　ろかう　個このめ　休志

野さき　元ろ　ぶて　ろる　角　池逸

ぶつろ　かろ　ぶ　杉る　子向　この丸　休雄

行ろも　加ある　伯父の志　ろ　ろ

呵ろ　ぶて　ぶろ　ろて　本も　余意　この　太笑

雪ぶ仲の　子植　ぶ　梅今や　ろ

かろ　ろる　ぶ　杉墓　ぶ　子向

めろ　ろる　の　ろふ　よ　意　ろう　梅の　む　休良

追加

西方へまゐらせ給へ　　兄左

人間を低し　街を乱小悩　彩芙

烟風へ舟揺らせある義象ぶ　蜂巣

義智を持ちたる者なり　　遠我

かまりめを清せ世へ霞しの多　雪糸

ゆう春光二日立ち人生経　　芙山

夢や行よ生るあり　秋の夢　春笠